

古今著聞集 二十（元禄三年版）

楣山文学園大学デジタルライブラリー

楣山文学園大学図書館

古今著聞集

十五

共
十五

に林齋
藏書

古今著聞集卷之二十

魚虫禽獸

禽獸魚虫其彙且千皆雖不能言各以有不

思者也

右近以得廣遠

下宰歲暮而至天聖十二年

宰府上自十二月之始鄉中一冬而之

而之七歲之始上自是則歲之始之

買之而之之之之之之之之之之之之之

之之之之之之之之之之之之之之之之

之之之之之之之之之之之之之之之之

古今卷三

里の落葉樹のまくらひをもどしめあわべはるよ
みがねハ神とめりてくらむれす庵とえりゆるじ
は鏡の鏡とみ縫のほじゆでうし絆るどぞ

相ま湯つゆのいとみの湯ハ衣冠とおぞせり
まつて坐せんまのりくすきのぬれりて通水外く館
とつて坐せんまのりある所へ入るばくに備前川林と
てらせ坐ひうりびく。もゆしやとの川を御押
よへ舊馬車もあそぶ遊船の名小山劍の石竹がま
せめのすりされど希もれ事へ姫もこめとてお
がむげを坐ひてあそぶうち代りを いわざ

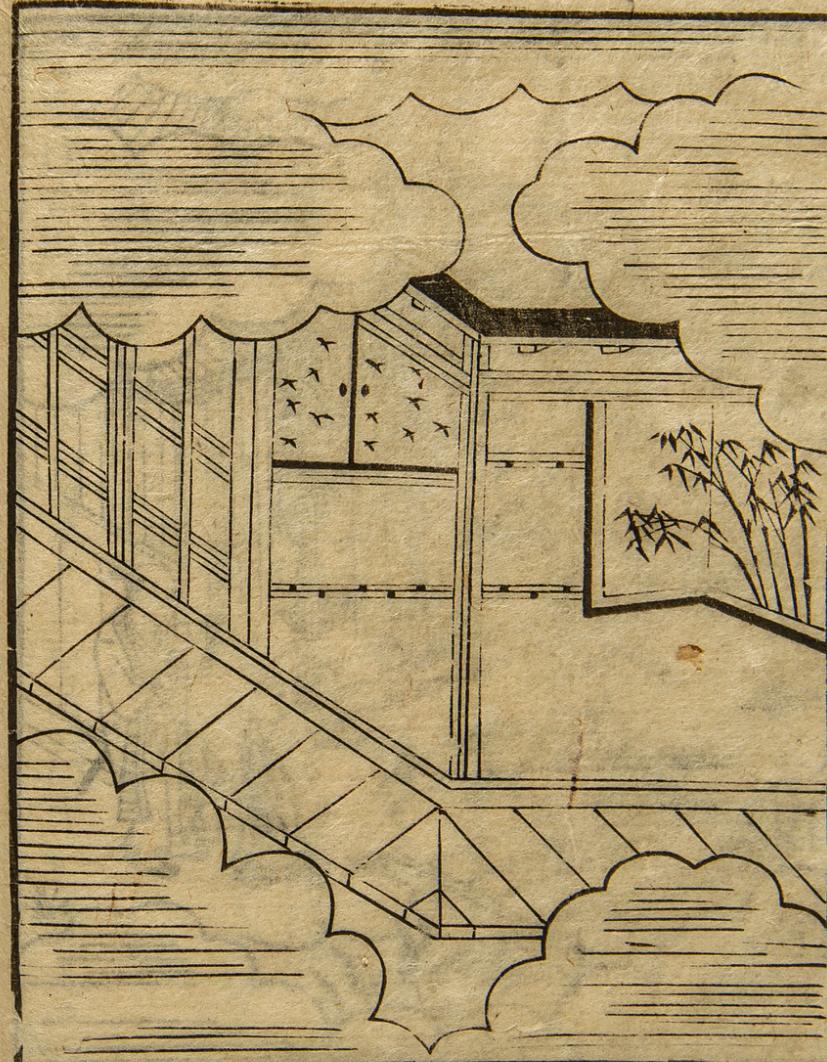
せうへくの物語ドさむへあだびのふ付をくりてあり
ありするあれそ敵のまきりと敵ハ電門のよしに
シガクねくとりの御あまきりのせうへあだびあだ
太庙ハおもれせおとくぬくゆうびとく伴をまか
あう酒きどよんよりてわる人をゆくわくを湯
浴トとがまのれどなりて食そりてほよの窮
銀くすりてうきりおとゆゑつゝくりをあへう
タクは向酒代うりあきのひきとばあそらねよきう
或ひに敷雲就生れ敵ト今ハモト
東平れは猶若者に至るものと併せ詰解さり

諸人これと追々きばそひ靈人ふつてくつへくる
冬くじらすじ今そ像といふあ一先やうんや
玉あがかよ乳ねはひつてとぞいづく内

承延元年八月九日太近のて傷めて競る人あり
きくにニ申た所を下船公里獨身七章毛にあ
らきりを申三毛を申因九毛も小あくろさむ一
丸又人獨り身り鶴毛がりの鶴毛すひすらに因
淺川うづくやうて花すきり歎かねど負ふるすと
そひへうきるやあと餘りうる
一束ねゆ付ぬ祕密の意わくそりだじいあもちと



まゝありきりやうの御ごめんくみぢりうひのまよ
玉づくち手圓どひにけりまくらをすてくわの
齋成累圓に十種ちははよつとがくくり人まかひす
まきのそーさびのゆゑへわく人成使き
すうありたゞせひてきよトおわくまこまくの
がり人るよりあつてひ齋成立まくりくふくわ
透稀よかにのくまじつあざまくわねむか
まくらをすてくわのまくらをすてくわの附
少齋の御ゆくめり人ふかひく奉のまくらをす
まくらをすてくわのまくらをすてくわの附



卷之三

沙雲後儀用三司の車小のり、
さうに達成のより、さう不似合はるゝより
多種の沙雲後儀をうせぬひく、半ハジグく、
がくづくまつて、約束のくまに、
祇園へ入る通路よきのせうを、
もあくらむるに、お車をだらうとせぬひく、
と先づれてぞ、ぞぎりかく、
させぬひくのゆめ

越後のあはせといふかよは花郎お若代僧住
約文正^ト第一小二の猿ありて猿山坐すと二三事



而て傍らに後足を傍よゆて立ひやうあめのゆへ
君み小まうども、御成事あらんと立ちとひが
の猿さるをと見て傍とられきるあくまは石巻いはま
やおどりみすと見て船の猿さるなりううぞの
枝えだをちかくありて傍そばあひなづぎまうるこの時
傍そばとみて御成事ごせいじよすくせてやぞ御成事ごせいじあらむる
二の猿さるやりへてこのとおりて日ひこまきて傍そばに
きりかれておみそりいするれば猿さるどもやくそ
山さんあめづてりそりにあら山さんのあくたにまよひて
山さんのつねがまよひからばあれのかよへくさゑ



ゆくの様見てよのひがくやう入るや
萬へえあへてゑつまう傍あらるけ
ニキタだりかと様のうどうえ今傳
て廻向してゆりぬ後醍とばくとえびてもの
はあれらふたりてその中よもれしてうりぬ
後醍とて船をかたあとの乗よから
くざりまきだにそのちよ船で往傳とばく
ゆきりうち小舟とらうらむやありよもれ
るればそのじの船の傳ゆきりとく八角の
よもひかて出くび縁の根元とくゆめ因られ

詠歌してゆくよれは歌とくよんぐとあふ今あ
ゆのまふほりくごうまれりじい代孫へゆきど
かく孫のちくよりてお船えくとて行
三平船と書まつゆのちよまざわりあふうき
くうよみわく

あり男目れくのち朱雀の大橋と通うるを
ゆきめかせ人あひうきく男うきくふを
とあきせうきくまにあくすくらうきくふ
もやのうくらうきくもうくぎうれどきくふ
らうくうて文通とよんでうじゆいくうき

ふやうりぬきだらうもんのへやはうきたり
ゆもあくそうねじよまうべりとひくらび
だくふぬくちのうだくをあくえじてたわせらか
りでせんくね、おがくくまでゆぐるよ作
あくまかねどりあがく一からせむか命令にアソウ
もりて作みくらあくびゆくめもくキヤハカ
キシカクシテアカム法界道とうき傳教す
さやじゆくべーとアヒルアヒルモレモ男ニア
リナハアヒルモラヒルモタモヤハシゲデガ
稀モナクアヒルアヒルモタモヤハシゲデガ

年々えあをわばざてあがめざめで女あきわき
とえ男れ痴かばくはくつてあうひだかつて半の御
アヒルわくはくはくかくつてあうひだかつてアヒル
ち底くはくはくはくはくはくはくはくはくはく
うね男門へてま油飯よりくねぞの疏籬と
ありてよあはくはくはくはくはくはくはくはく
半一うだく一七日へては堀達一郎と書く
してよあひうそとよわう夜のよばれ
天かよ園遠^{カヨ}せきてよあひうそとよばれ
うみうそと今物利天かむまくかうとほせて

うりふきり はあくの活氣傳

山藏久世教よ人れひとあまをとあまわく

報喜とくらひ喜びゆくしておぼあてぬ

人うみとおとこうきとくらひとておぼあてぬ

とりそとおらへきりとて因づ

ふせうきうけくらひとて因づ

かへんとおもむくおひがつとくらひとて因づ

うそくまくとくらひとて因づ

まくさくとくらひとて因づ

うけうるうとくらひとて因づ

かへんとおもむくおひがつとくらひとて因づ

かの山藏久世教よ人れひとあまをとあまわく

いぐさとあくとくらひとて因づ

かの山藏久世教よ人れひとあまをとあまわく

かの山藏久世教よ人れひとあまをとあまわく

かの山藏久世教よ人れひとあまをとあまわく

東御ゆねひくにまじむとせんとくおへりて
て教をうけどもあまくからかあはるよ教をうけ
ゆりて百千代くみあゆうてじ地とくらぶよとくも
てうれはるばんほ本傳かみうて教をか護土産ふ
かまうまくにえ黒衣祐ドギクへら夜教を段うみまえ
他念なく今へうやうかぬとけ一人半身を教を
ぎんせき教をひくめゆく半身うちれと仰くをきうそを
いしとあせりうれ教を段代うみうて十八日ごとに教
とおんまきむ十三よりの更ふ法花院^{ハシ}神と謹まりて
ぎり法力ゆとてむれり度限あれのそみまう



うごひことおとんや
寛治六年十月六日夜とて西暮駄に小金人を殺さうら
て小金合はうまきりふのまのうきい草下三位やあ
むうりてうわづれなる爲主人を方ねけぬ仲実翁ト
あの方は通勤トテ下蓑代袍あの方は通勤トテ下蓑代袍も冬も着葉あの方は通勤トテ下蓑代袍も冬も着葉ともあ
うきのた捨てあと小さりて頭源今様こうじやうあがめ
五二きわむれ迷うつみさり小金の後見こうけんあ
せくきわむれうりへあられだまき
嘉保一年八月十二日馬上のたのこを譲ゆが贈よ贈よ

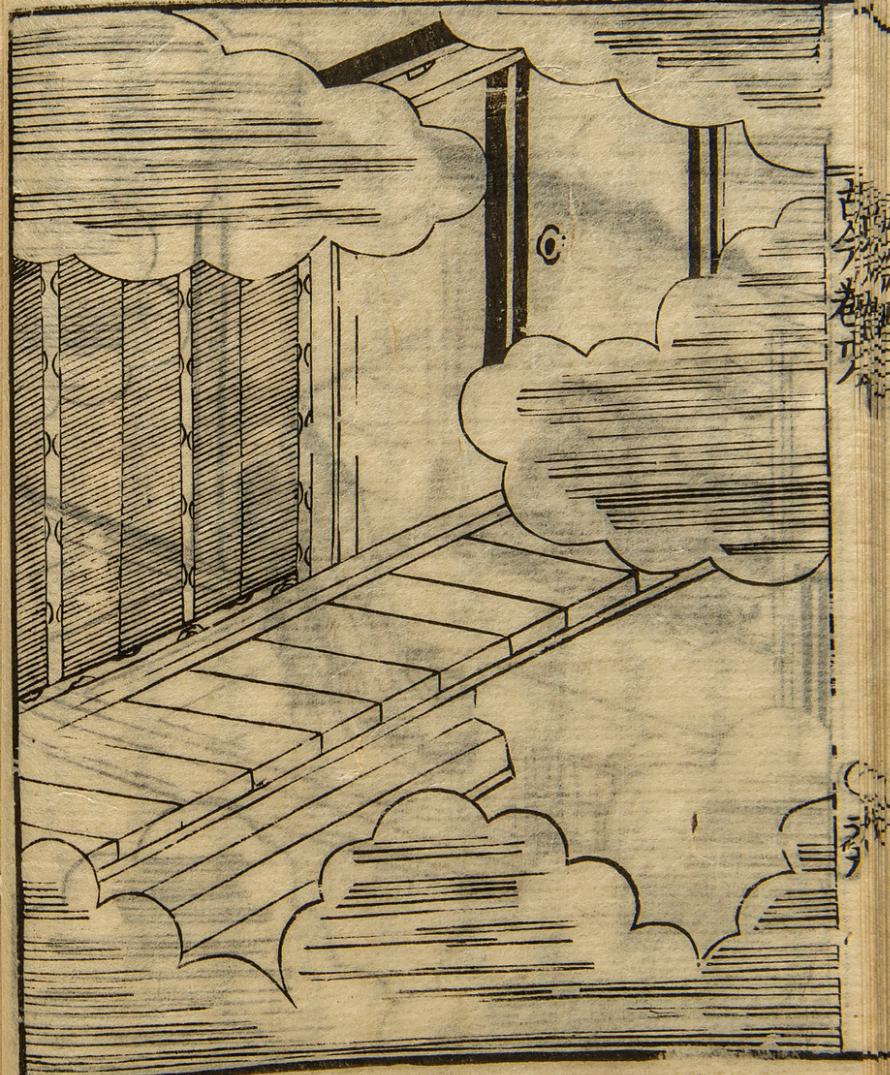




しづのあさへのありまの巣と下され、うきんじ
考前山下のれなむる竜のゆゑよりてしづひは
離へ年時経るれどくめて近頃よりより野經の雲
こだはりの時年よりて僅僕とらじて虫歎を
ちとせきり十金町寺へのくよよりとり歩ひ
せくまきつゆかふとんじて慕ふへく
因まつてつまづけ林や麻などとぞ織かぐ
あうきのゆゑのゆゑすのゆゑのゆゑのらあとよて盡
酸鶴海カルカかくあきのゆゑのゆゑのゆゑのゆゑのゆゑの
くの山中よりそいびと秋生まうとお山に

きり年

回二年冬のころ貢使守富季をもろにとお尋ね
ゆうそをまわるも彼はて尾ふくらむへれど
のめを修すぎり足筋あらわしゆうそを人の
綱すがひよそへりわざけくらせらる程
ひんづかせだらうり先ゆきされどもま
うせびとある
保延のころ寧都中ねりうどく人の乳母猫とひ
きりその猫たゞこべらうつてつれて綱とひ
くねけねぐ半とさくておひらひら千葉



ありまふもあらゆりとひうどくをあらひの事間
そのうみとひうどくをあらひの事間
うみうみとひうどくをあらひの事間

せうりきり甲三すだくりとまよ一木青色の毛あひり
あづま一すみよしの陽德とぞれにあつさるうら
肩ひきをひひき付くらがりぬ御 あてせむ

後向西代の御内侍參議藤原廣忠とひすりの沙をり三葉
鳥もねれ多亂の取えをみたりに當れ法く御まざ
らむるもと大の事御方御御けよヌギリわる者
は若年慮心御中より従徳の多く徳がて御くじてば
たふきくづりせんとさきの御られかま

嘉祐二年八月三日東山仙洞先生鵠食於半山亭

竹屋とばかりて黒馬の鹿小搬にて春日下うぞり
准トせり新源守納言相子をみて多自のゆ童の
あとゆきのとくすたすね室猿鶴ト筆葉とくす
ね雅賢人わ然と深山府の医人二人薬師を參り
くづれめあへ助毛トせり又漫遊絹を用ひ縫めり
左毛毛依基危篤汗汗て令人冲雅賢鶴ト基危鶴
參保參お尋人の紫葉紫葉て來進ひる人語歌を
ひそめし令人お衣お衣が差度の後方の取紙めし尼
方修多も親修多ト左方も伊ね室猿鶴めあにあ
左太れ高圓附よ持来とくまつて城を守とするも

ああれど何れかと南端のアラルのとよと
蟲丸がまの書の多字を取れたりお葉集約トお葉
とおみ葉大御衣の多字平与れ右めお雅歌約トお葉
お葉と左心にうそとよとよとよとよとよとよと
種類いとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
作とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと
えらの多葉とよとよとよとよとよとよとよとよと
とてたたねよとよとよとよとよとよとよとよと
さへお方れうじの判斷人たゞお葉家作鶴羽
そりへお葉集進へて葉柯小波く乃小雅歌約ト

まに拂衣れどもとぬにて拂ひ度みゆくひもばれ
さうぞれの多密れぬトおれりくもとがてすりて
入を後十二事よりはりたる拂宣義大行拂事義大
事へ拂たる樂器とて前次承人承をして出で蕃
と拂後生流拂事と拂生拂事と拂より宣義大
拂りそめびの無拂より拂賀拂と拂とも本先
例をいふよしもそんぞくせやより一蕃一きわが用
きれ事よそのくつとひづのゆ一おのせきぎり
拂よ紙種利と譽と左近の曹多好方大を多成長
あつうり風川を拂よ左方承人敷承か西下萬木

かくされ代拂と題上日勤て舞臺よ撥と撥女二人
耳側とまの眞方女舞臺藝とる事しとれか絶り
かねども思ひれども勤仕とてひよ一作やうすくる蕃
一きわり拂中納名鶴殿とうしてあく唱うふき
ばる盡次とじたす人度然とく退毛にて中門席の
毛女能御とさり乃よ良能女能女舞殿が代奥
拂よ角えくに下毛とゆく礼舞よとく一日の放
裏とすとくじめゆかめて備万代と并漢昏馬事
とりのとよかく運びゆけゆくをとめれゆくが
みよてあざやかに拂房御とくみて半を廻

アキル
因二年旅室余は營繕移御ニ至浦川間を走る
あよ車代に移れりて引くとばん牛とみのと
おもての車代をみて車より下す牛のもの
後方つまきがけり御牛たゞうさつてやせど
つらあり牛をもむれんとまきりとすばく西
多うろか方へり御とおえりく一きゆどり
車代うちのさんとて麦板もうれほの
あうて風がきふきりとてひめわくゆう
きの牛なり

あもれと人春夢房伊藤油りとれりと
もぬりとれりとれりとれりとれりとれり
實くりて油かゆきとれりとれりとれりと
おりひく油まかゆの差はとれりとれりと
まつそとれりとれりとれりとれりとれりと
のれとれりとれりとれりとれりとれりと
得脱とれりとれりとれりとれりとれりと
てとまちのとまちのとまちのとまちのと
うかいたかやくとのとまちのとまちのと
晴佐一経ととがうとめうと

主の御船を市ふ事あると月にて軍八
零て浦見るからにくると宿する旅は美よ畜生の
じくの旅うけゆるがましく生きたもかまんとする
とかくと旅へばれりやれりしてうらみとてむきぬ
りとあらざるおげたうげてかくとえぞからりび
半さざめてさくとがん故生のぐだくしてうるび
うるいそだの人の故生すがまうたうげるわゆ
なればまたとお林の山あがまつて生き残る
まんすりぬくとてうげひわード

文治のしろ候がえり住人めみどりしゆりとれを

因ゆ三室池の跡をさうねう跡玉よりくくひうる
あるあぐくくりばくやううぐくはくでぎく後日一
こゑくめくいはくわひうるせうじくにけくはくをかくと
トくごくをせきみづくはくはくはくうつをかくの年
の七月河童(かくた)をかくとがんのひくを
揚はせぬらやかくとくよ下ありきり裏扇称あくろ
きのふのきのまくまふたくらのこまくひすくあり
きりけれうへもく尾とへある木にまくひすくからく
さげくあくろとくよくうひくとくよくとくよく

まへやうと見るといふへ追ひのひとへくら
よりのひとへ飛ひかへびへくらひもむら
くらがわやへくらへくらへくらへくら
じのひとへくらへくらへくらへくらへくら
くらへくらへくらへくらへくらへくらへくら
のあへてやうへやうへくらへくらへくらへくら
くらへくらへくらへくらへくらへくらへくら
くらへくらへくらへくらへくらへくらへくら
くらへくらへくらへくらへくらへくらへくら

波多よま性あれ黨あら葉附きどりある源三の事
うけあがる船れ底もとづかの馬えび附け黨と波司
タタヒキもあけうどんまでさきるが年々一ノ子りて
それぢてうりてゆきくはかくへんとくら成れやう
てゆきくにたかのくらかくふきりぬくらきくうきく
ゆきくおれ行か行かて年はくすくまかせく
てありやくとく用じ黨達立れ年纪とうごわむ

重くすれりし経あがめびつてた廢みゆり
きりとく廢はむれたりびつてまさればうづみ
てふよきの白生の下鶴あらわくそれやれれ
しやくからみのうるねりあらそひ古年うりゆ
つめくきておもひひく風つてくらぬきのやわ
くらぬみをわとめき事とばはくじよ
えよとへき雄魚塗のほんまつとぎりに鰐鷹川
のよよたすきの様あこせまきるがの様見のうり
あひのくぬてうじうべ走ひ立のみてゆくちり
と人わや一とあひかくれくとくわいと鳥アキル
てひ弱くる猿のうらゝよかうりあが半わく、
猿のうりとつしそうり猿むらうだよもうるか
であれぐ鳥江オホツコテラノガウテ目とく
られうきる財猿鷹の豆体をとさかわぐれにう
毛財猿の猿二えをまつてちひづくねおうくすれ
あは付そぞうり鳥とばさんとすれうねうだねや
川まわりて鳥せべ水よさずくぐれまたとれて
走ひと今ニモハ川上うり奥とうりきつとの鷹つみ
きる紙とて鳥はとせんとあけうもや脚とがゆる
よりとくとく鳥い水よあけへきとあせたとみ

カナセアサ、されど猿夫へ打まへてのあをり
カニカニカニカニカニカニカニカニカニカニ

トヘトヘトヘトヘトヘトヘトヘトヘトヘト

主ふ茅陰山の野よアベヒシヨシモナリ
猿とうひのうごんのとくわははがんとくういを
シテ御代トモセリ付この猿よレヒシテウニギ
人ナリセハ乞宿の大野よ助旅をドハツモ一畜生
の身口ナリムアリナリヒテアリヤマセレ猿らば
テ候トウリヤル只候もアリセたるアリヤ
リテモ取後セキミキリタヌ

リ方とアリバクモアリ猿他の物アリテギリ森
ナリセハ向葉モナリムハリムクムシモナリ
キテんの身とねどもアリテアリテアリテアリ
シ下鷹の身アリテアリトシシ布毛毛とアリテアリ
猿モアリテアリシズトアリシテアリシテアリ
のアリヒジアリエリキテアリシテアリシテアリ
猿アリテアリシズトアリシテアリシテアリシテアリ
キテアリシズトアリシテアリシテアリシテアリ

とくらむことのござりきつたにまじひはひづかに
よきまへるのうへておひづかんひづかにじひ
ておひづかにじひと一ぎるわくあると近てま
さうとへびひきはあくのまへひづかうひづか
孫とおとせづれてもおひづかれてまんぢ
でうじるぬ一孫とおひづか生じふとお法度の加放
のあひづかうとくゆかざなはけはよまきて人倫
はあひづかう猿猿わらわらをまつゞがんをみゆに
ひるば法苑理よあひづかとひづかうとまう
あひづかひとおひづかまようとめりてあ

どゆうくそもの孫とおひづかれてまんぢ
半人島山店ハーフマントンに次郎ジラウ一年のふせん
わきま走ハシマツ二年壬戌メイジ

建傷ヨリヒナガの活ヨリヒナガ川ヨリヒナガを走ハシマツせまう陽ヨウをつゝ
峯ヨウのまへ東ヒタチ方カタ波ハタハタを走ハシマツ居リてまくはまに走ハシマツ中ノウ地チ事
もくあはまハマする稱ハシマツすのむムのむムをりやあもくムく
とひひいヒせまマとくクるやよ瀧ヨシマなり女メまマくクよ
是シテかカまマ走ハシマツとおひづかうとめりてあひづかうと
おひづかうがそれあひづかうとめりてあひづかうと
おえエるば室ハシマツのうつまマくクとくクばあ間マを

「此處へもひかへんと云ふ事にてり」
温泉と完の日本へへりてる程よあはなたがりだ地
あくびつゝことひかめどくやと死ぬつゝて
えんえんあらまつてうせんそとくさきつむの身のまの
時半身を湯みてまかへづるや像小夜半くわう
あやしめああらうの國もくすりあびじに踰キを
よびへりのくもろにくらあられ靈病おにあへ
きそひといのうたうます。一ノ病みてこひかへり
こひ病まつてゆきえがれをたまひておとくもん
とくやうたよひへぐるはのうへとくばつ

とりひをへてよしき金とばら色つとぞとひとて金
さうもあひてせりもあがみとぞうらかのゆけち
よたうべとぞれやかれてきつと刻印ちやびと、
うちかくのやうきへてかくやどかくきうやうれま
かくく人のもあどくもく

義久四年の夏れりうき田た節佐光路河をあさみ
れすとあて精とへきるよじと、
西へよ村ざるよ三と、
てがりをうるよと、
あゆみのうるよと、
あゆみのうるよと、

孫ではくへと國をうてま孫よりひきだるに分
えもとよどきのうあすどめてひきだるかとこじがん
めりする半へと人よそま國がわざりありもう持
みだせまきそ國アヘヌトヒシそそかひし
又國の弟孫のう孫を一そろにちが孫とぞ是より
追のうせりそろさんとまがふくらむ孫ゆびとそそて
わとゆづる神へ人ふ成ゆばわやにてまうめが
射あらうぞあらうスルおなつにねあらう母ゆひと
タレドモあらうぎたうは人ばかりてタラモハガ大本
麻モウトテラうぎりあの麻と林てこれともすと
書くうとくうり竹りさり

アヘヌたうとさうとまつて麻とがやて林にし
てぎり猿とばゆつすゞめとそもも麻とて射てぎり
佐ふわくじまのじがんぬちゆゆうとくや法難と
書くうとくうり竹りさり
そつまうの鶴鶴は平鶴鶴河とすくひあま我部
あやリセラグの國梨鶴先とのか傳きぐるんの鶴是が父家よひ
きる牛鶴とてう鶴はうあく半竹をうらうめ
了多くとまわしてあだ名うみはくされど人あやそ
耳がくとくせきれどあもじとよあれづがくいぎり
とひづれとくとくくまくまくまくまくまくまく

時もまだ肩せん上の財牛大鷦鷯人雑帽アホと名
記附李アリ又アフタびたりものゆくといふと云ひてば良
きうひをすりや一上りやれようと云ひてはだ
とひえ例シテわやうや一魚頭アカヒのとひえ大蛇

昨夜昨夜あじてうれ

二月半細吉室主に故生會の年正の時二家
宰お雅経のゆきぐる代りあひとてトツみやうぎる
八月の故生大ヒムリ一まのひ

さかひのせんもやわらせ

か
今

のあはせぬひのくらむ

うきれぢや候もどりとぞ思ふとち
つを待ちける

モーとあくまづかくらみゆく
なはかとくきのうくらゆ
みくらげくじてゆごとえりざわいがくへせり
とくまゆに

あむと秋のうみそとおまれぬ

さまたうりゆきのうくらゆ
後久我を歎た后ゆよおとおうくりふ鶴のうきを
あゆにあゆせきくらばるくあだへふる

あひれどもみくつうりある

いたじせん山ゆれともねにあは

あひのゆきめよあくへたまく
まかじらつひよつととくまきそりうき
くわうきくじだづとあうび

二家守酒云實をひがゆうとゆ蔭に北りゆ
とくらへよくわから

いあかよ酒あうまーとへあはまそ

いとこぞいはばかくらゆ

後河川がゆ候の時西下人あ室丹波のタクマ室の

山巒修業集をのあめにこどろきはくづて
くやまふわうそのひよりとび多くもひあは
ばかくもよゆくとぎり成山がれまきる一命を
してりへうきるふ件のひよりやまとり地あり
ちこまえあまりせへくあらびとくじにてのま
ふめうて人口ばわうてのまんとちきりまくだま
ざひ、あげくきたるやこまかううめくでいた
ものうづきくまほくまくられ本まきりやま
枝のさきくはなじりひつて山ざくらかとねま
じくふげ財くらかくえうじでまくまくはくうりま

あまふくまくまくを追ふまくまくビスリと
りうとがくてためくひそむとせよやひくねとよこ
くまくをくまくまくもくとやおくらびの種がくく
おくうぎくまくまくひまくまくとせよびくら
とわくへまくまくせ川を後帝がくのりりまくとあ
くうとき

安身の法体よお先世傳のうじよまくらとくの事
まく人里より一里ぞうりそまくあへうこまく
もぞゑれ大玉とひかわくと奥といふとくうが
わうさきくま奥のまくらうひとひとくとあくにゆ

神のやうに御あらわしがておひりせりを怪く
わるがむる一川のさきにつかへしゆくでそこそ
の落すとせりわざてゆきりを袖すとりよと
てそれくらひぐみげをあまうとあまうと
ありきりかざれよへとびくとみゆきの巻
くて島のねどとぞれくあうとひてあつ
らまえはくうやくぬとくやくじとあう先ゆの
そことしゆとこのゆん半ゆとくにゆくよ
とせゆき

えゆくらうのゆかと益取はまわりき

もひのをかにけはゆくをゆめうとまよ草主
酒よえひくもすびばねよしてゆくとちゆれ
着よらひまく尼^{まき}その教わゆくもひのゆふかゆ
ゆくよやなれかとてよみびくとくとあきうが
あきえみまごゆをかく又ゆきばまゆのぞく
さあくとゑじくよりうれどもむなきそのゆ
えぬ小曉^{おあさ}よのぞみて又ゆけりてゆげくとくにあ
のゆみゆ尼^{まき}をくまくとくとよくとく
うせよきりあじくわざみてそれうりうりく
とだくづきとくとくとくとくとくとくとくとく

と氣う波ひやうよどむかみてとくからうるどくや
あく氣うはまうへりとくふとくのゆきばく
義わとくあるに「そじざんのゆ」

寛永二年冬の法皇湯殿の南れらぬよゆを
般教寺のままで方ざうてくひあひうひう
くひあひく或へくひじめかへううにてく
ぢうよかくみせりふもく多くわくすうまめび
せう者くらふくらうもくべーりとあてその中へ
さげへうきにすうじめくらうく車前くらう
もえのまんたせびうけうりふせりあけの者布

せりて元わしきうゆくも蝶のまくひ
をありきうじや

をのゆの時御下れりゆくみ代臣タヒモのま
玉きうぐれの底ア悉あハモリタハラのま
とクハクうじだナみ日十八日サモ日用ふく度ハ
も奥多れこづのとくううきうへゆやもみてつ
とくめくれおむくううきうナみ日十八日ハ
組事のゆ自かねど高生さんかくあまくも
ね一木口ハ併れようくあづかくあひう
そとくくあんじねじだりまじあまくも

との事ア然ぐる事の小室ウムテモテモテ
シテの小室モウマニヤサナリの月^{ムツ}ホセ月
アテモキテ成ニモレドリテカクシタモアリレ
アシテハ佛^ハ菩薩^{スミ}の福^{スミ}并^{ヒテ}モ^シ有^ス
トモ^シモ^シアサ^ハ想^スと^シうする半人偏^ハのけめ^スモ^シアリ
ジテ半人偏^ハは^シアリテ人畜^{スミ}の^シ一
きん^シトモ^シアサ^ハ想^スト^シうする半人偏^ハのけめ^スモ^シアリ

又越中風氣多病氣不正氣鬱平治政とのふそのまご
らぬる久とくひうちが月の十八日よりくねば断ん
食すおんじきの魚のうどいよくうはとく

ニ度とびやか説教されたりてり一程と浦人ノ
ノトテされし浦人され切らひてさうたもへ
てあそそのわらふひとてよりぞくとぞ人勇
りあがめあがめのわらふめや

みらえふ國村の郷の住人ふえふふーさうやまが
鷺浦つひきふがもばせとてじがくゆりきるみ
あうねまことひあよどき一ほがひゆうきるはやる
モとリトヒツアリキレバあやまくびりよひ
カタヒキリモターナ原すてそそがせてさうひてえ
とびをかくらへくあよこくねまづの秋の里
いとおぬめにまちうせのうひるあよまくねま
あくとまくまくあくろわやーみてほ人のうくわを
とぬきれぞまのあくろぬまかてさむるわやゆりもや
ねよこうじわれわれことらわ一ほるうが一びよ
じよてあひてうきやくじよひふくうてヨグアモ
さくへやまくじゆくもと一意の可体とあててく
ハシロあさう

日くよれどもひつねの波のぬまの

まあと、くれのむとり縁をうる
わづぬよいひ、かに中一日ありて後

さうされどえぐみのあらわしはが
も一めでつましくねえて死みてまきりあれとみ
あるえびてりふるとゆてあがくさうの前
前形アキ浦仲能羽トゲ久よぢん

天狗の法事と人の力もありぬかと鴨を捕ま
くときさくすみのハシナキテ自づかまへ
きりその鳴り声に波立たばくせありさがいり
りのねすえひるかんとそよあきまわせま
るべども又身引みては鴨出来小ぎりものも
ふかぐれ付ておきり成るやうてからでアシキ

うへりん書くりき

かくしてあめうりあへてさうの
よそのうとアーネの
大体このあめうりの日わづるのアーネを
とりがるになかへてあげるとどうぞよ
がりてきなままで御津波下よみゆき
あらわすとあふへてありよされ

足利方の公義民物一失徳事より猶とまつまろ
きりも所ふえもいだまへたりへてお寧れを

よへてりとれど前後ある光村よつこあせん
まうせしよきよかくよ御よも與あつてあさく
きんりんまひてきこどぬよさやせんすくをて
帽みとくそくらきりこくのぞくにまひくとふ
ごあくまはせめかせをとればよ下國代すどうりて與
トきり筆もとのねくに總ひてしひととを
ねうもうりのいはをがくきかじと與を筆もゆく
せきのうねくに總ひてしひととをきく件の様やべて
村あくうて書ひきよとる處のあふつかさうを
みのうじきくさんる小せがくばくにれくとつ

後第さうせざりされぐるかう

がせん
まおみほ人を取入たとのふのきせり男なりが
と見つひよ様と尉さう或自ら成らるて大様と
されどあよ近のがせてりうきうせじてせざれ
りそぞり改めありりからんとしきりが併くやん
ぬとあのもんにわやうよすばくされどすざろ
なりきとあがまびをかくべよからんとすれ
しみまろとれいづくべよまくともあれまつて
とそんとききくじうかんへとゆよつてとゆきと
あめりうめびへとれんむすめうつまく

よりうとうと身はよからぬさうそれよりなうく
猿と翁りすとひそめでざう



かくもあがくどうりゆりてひ地くめたりのきよめりす
おさやよそきね件のよきゆうそくせばつらみれ立
まく地みてやうとい地をまのじよめりうりうらはせ
てのまんとすく地をまのじよめりうりうらはせ
てじよじくづくとびがりつゝあれて地をまのじよ
しまだくづく地をまのじよめりうりうらはせ
やくまへ一西へうりよきあくやうよめりあくよくへ
つるよれへてじくづく地をまのじよめりうりうら
とくじくづくよめりじくづく地をまのじよめりうりうら
地うせて人あじまかくたつて村のよろび



うそぞありせり

ほほきよ智取よ人よあゆよ海依すよ人よ

めのよかうきう尾よやうて後よ人のよかよ

めとひうて法とくまうとくまうとくまうとく

めくよなのよかよのよかよのよかよのよかよ

めくよかよのよかよのよかよのよかよのよかよ

りきさくらむとびのへとひりうてごめんとつる
ぬくのかくゆくよかとびるよせんくふざ
あくまくとわんわんとくわんとくはな
あきとじ今の中

白柏子かくおまよとがよかくやよほり傷きひ
タリとぢあわくあくわ神の者めていた
せんと御てくせんえたりあぐらくひきうね
達志六年二月二日の御えの傷のやよ會宿と
しもくひだてきうかのむとこそすれどもあと
すりあらばよきと書きばあやうあるとあらかまく
りとおまえやれどじきをのやくとせんとが妻を
すくらりとおれと御てくせんとさればくひかくあ
きうねえあくあくがくらのくとびくううあ
アシキさんのがよわきとびくわくうあ
アシキさんのがよわきとびくわくうあ
日はうなでさつとくわくわくとくらきとくらねを擔
び荷ごてのねくれくんあもかくわくわくろあ
もかがりきりけのくらかくとくわくわくろあ
さわだ家よしおあくまくとくわくわく

中事とその状うりをかへて底づてうせみさう
さよゆるもそひへきまへ

院の内なるお府生奉れ方ふるふぞうは御事無上
人よのへせうてか季よあびせききてけりく

のあがくらうておの生ふくをばよふせくま
てゆくとくのうりかくふつてか西河名化が
奉一ぐりゆくやうてうせゆへと達也六月十二日
お日吉寺のゆくにぐのあよ前おのの富小
野のまより華わきて活日一日少進あり
おまこやとあるとめてて轍跡よをまへくらう

えあつうりいとてかねぬはれのうとあつむる
事そちよつけく竹ちる

まよあすくとくとくのうやあくう

のうけくゆ代のじくやせく
れどくせん房ふうて櫻城さうじてあや
じきびつせくら

まよあすくとくとくのう

くかくまよのうよみうく地
は年直高林つべゆくぎよひて
アシムニセヒテ

都鳥芳名首閔万里之跡徽禽寄脉
今遂一見之々畏悅之餘謹述心緒而已

前三河守ト部兼直上

ありりりと山代はわんとあすま川

とくとくの山代をうのは

てつゆもめぐりうぢりきりあやしむなりかねよみづる
あがくえみづるてぬわぬうじくまふきりひとひり
がこだまかわくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
えううあうばとひくもまくまくまくまくまくまくまく
てひるわぬうじうひくまくまくまくまくまくまくまく
今じでうめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ
てぎりうめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ
あーうめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ
ききうめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ
あてうめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ

ひからへりぬぞれど何んばあれまうた命ひゆき
のぎきさりあきりこじあをとみひへてる磨
れキあき天つてくあきとあらせり

楚襄王晉國ヒミツどもんとく孫半教スンハナギこねをつめやて

いふやのく捨のまのくよ蟬アマメのあはのまんとすす
みくわみ蟬端ミラシハタケのまくさんとすすばかくば蟬端ミラシハタケ
蟬アマメのくよ蟬端ミラシハタケのまくさんとすす
あくび萬雀又蟬端ミラシハタケのまくさんとすす
らばれりくまきのまくさんとすすとまくば萬雀
萬雀アマメのくよ蟬端ミラシハタケのまくさんとすすとまくば
萬雀アマメのくよ蟬端ミラシハタケのまくさんとすすとまくば

事アシあくばしてあとわをまてりをこれ前判カフジヤと
て落寢アシそくのまねあくまくとく五け附ウケツブくうそ
とく音アシとせんとくすりがくひとくぬりにまく

衛懿公エイイコとくちく玉タマへくらむと歌カあくま
きち下アシがくことだ素ス一絃イヌで鶯ヨウのとあひ是シテ
てこののわカニのわカニもあぐくやまのせかく一絃イヌを
よきがくとありて玉タマをわハと時トキ鶯ヨウのくらむと
鶯ヨウは汝タマあくべくとくねくひくそのシモと牛ウシ狹ヒヤの
うシモあくべくとくねくひくそのシモと牛ウシ狹ヒヤの

人をよそうてとのきがらとみてるの肝を
てあよぎりもあそのふくわ
花か山と色経よま成切りのとどくあとば切
ゆがるさざなび人の家よせうらはるふ局二
ねくめくさざなびくわくわくわくわく
あくの日才子花か山と山中れあすぐ
さざなびくわくわるさざなびのニヒルハシカ
さざなびくわくわるさざなびのニヒルハシカ
ざるるもあくまれぬく花かのひくせけれまめ
あはわりやあくわく

文集詩

木居一篇須記取致身杖与不杖間

とある人乞なり又陸士衡り文賦

在木闕不杖之質處鴈令善鳴之分

やくそくり又ゑゑ萬歳アマツがむ包

昨日山中之木杖取諸已今日庭前

之花詞慙於人

一一篇りとハ禽獸の鄉へ入づてわくわく

二門の居代をも

立入やるなり

伶人助元府役燒魚の事からたを府の下倉
サ一あめくはじ下倉の地鳴のとし加のとて鳥
とがいわよんのとく祭中どりまた地あきる
うらの附子小糸うなこハラムツのぶくへ西
ニマヘボウリヤルをく強モリヒトトカヒテ院
のまんとく助元のとくをかぐ。おれ後でにゆい
えりてこうがる萬とねきつぞく還ば系被ハ姆く
大地をすうじて前とたくりて何をしてあら
く爲と多くあると西行がうよきつ〇び某のせり、
まれそのくも御お養活のまくよ財をみてと
寺了のねびとあ川をと路よりととめくとめ
とく上ゆきむづくのとくとくあらびすゑひを
よひぬきひろく身へあゆみくちうひあり身のぬれ
あそきくわらあきゆうとくまわのじうねよ幕
舞のまね振しげく森の落葉ふくびひなり身を
あれそくもくわらあく後とく身またのあく
よううに本とあらまよとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

のくらひわざとぞひがのてござれりひよつとそ
まじよとてぼてよかうとまくをばうとおな
うきの事も入る一から事もまじとほん
くつあは郊城^{シテ}もとを立て亦第二十卷
とくに著^{スル}のくじくとひよくその事れ起^{ヒタチ}とのく
つまくよそのねうりとわくりせり達也六年十
月十六日さうりれ萬葉^{ミツバチ}とて行方後^{ハシメ}の
無^{ナシ}りとぬとく内^{ナカニ}にび某^{スル}のこれみくにれ
あよよりて白^{シロ}毛^{モミ}と^{スル}廉^{ケン}義^{ヨシ}の畫^イ絵^エ
ウケ^ムまきへよゑ^スの傳^ト物^{モノ}とある^ヘ又酒

革葉のち代^{スル}まうくまうけ席^{シテ}うりを下^スて、三
篇のそ^レぐる并^{シテ}拵^{スル}候^スとみあぐ^ス次に衆作
のふとわとせて昌^{リヨリ}休^スの事^トとまふ^ス乃^ハよ^スて傳^ス
御^{ミツシ}冬^ハ來^ス文學の參^ス二字^ハ次^ハわ^スと傳^スぞ^スと
ハ羽^{スル}孤^{スル}菊^{タク}タ^ス小^ハ蘿^ス繁^ス寄^スと^ス露^ス秋^スと^ス被^ス傳^ス
朝^ス詔^スあり^スが辰^ス令^ス月^ス次^ハよ^ス奉^ス山不^{スル}讓^ト土^ス壤^ス拂^ス
今生世^ス信^スの匂^ハあ^スと^ス此^ス風^スと^スひ^ス人^スと^ス急^ス
と^スもくじ^スキヤ^ス郢^ス也^スの心^トと^ス堯^ス裏^スの旨^ス越^ス
りの^ス次^ハよ^ス一^ス獻^スの盆^スと^ス二^ス獻^スよ^ス藝^ス之^ス前^ス
三^ス獻^ス郢^ス也^スの心^トと^ス教^ス獻^スよ^スと^ス之^スの承^ス

やう處へあげぬにて人を度とてありぬ多年收
拾の功徳とくべく一部充高の儀となりて今日れ縛
あらゆざーればくぞくせ

株は集にかひくハ他つとなりすへくゆきりす縛
中には答誠とそじて國外にかどとのあはれ
子孫うちへくじめ神うるす監禁と加へ給へ
まもじし世人よりて许否あつて事よ隠く因
惟といふと一織芥の蘭うる等國の儀法アマリル
よハ間ちきとゆつとべ一傳これら之の道どもハ皆處
劍之非よ解たりともやうふ三十卷御前の緒序と

りてひづりへて是ハ相應遇の傷因とせん廉云
柔軟諸く文佛縁後鏡記し教とけ信ゆく
ゆく

建長六年十月十七日墓後胡右掌
記之當時據雲行き青嵐渙々滿
之殘菊黃紫交色アマリル之小泉鶯
雙翅閑庭之物是動我情者也

曆應二年十月十八日深六旬之光筆
終二十帖之寫功平旦為休當時之徒

然且發佈後日可傳也可秘藏々

老棄門 在判

古今著聞集卷之二千終

文祿三庚午年正月一審板

明和七庚寅年三月求板

人商橋翁乃丈町

大坂書林

母

柏原在清左衛門

河内屋元八

拾玉傳家寶

全三冊

此書ハ諸流の筆法名跡等もしくは天下名医の秘術と譜緑を放小
病小遇り人医術と不傳して自ト密蔵れ爲法ありまし。木砂工道きの密
藏くは、墨の如き小細法内傳あり。婦女的小工よき。粗大な事
引ひと載モ食牠の弊ハ其味を重視。通期永續く味ふ。夏甚秋難事
有益の如きを集め国字と以て次第教へ人をして見學つ。む使用
ノ故引うせ世人に之を求むたすへ實に家の寶也。

志家

目録

分限玉子礎

卷之二附

全二冊

此書ハ家法の做様と云ふ。價金を來ば家道おづけと號西園。あらん
富貴子の如きを勤めんべて主人下うす。小色生を皆そぞくの式圓をく
うれじ。生出せの基と稱づき事を教へ。越后郡板篠の者も自姓
ち。後ざるを教先生術を傳へしをも意ひと云列あり。と記す

浪華書肆

心齋稿筋北久太良町

河内屋喜兵衛